

記者 「久松さんが看護師になったのはどういうきっかけだったんでしょうか？」

久松さん 「私はですね。(生まれ育ったのが) 農村でしたものね。今の漁港の先の方の村松^{むらまつ}の^{みえ}三重
というところの三重村だったんですよ。お寺が少林寺っていつて。もう本当に美しい
お屋根をしているんです。

そして私は永井隆先生のところにあんなして仕えていろいろしましたが、永井先生
は私にカトリックになりなさい、とは1回も言われなかった。嬉しかったですね。ど
うしても私は先祖様のところと一緒にいれてもらわないといけない、とそう思ってま
したから。仏教の浄土真宗だった。それで長崎医科大学の看護婦養成所と2カ所受験
しました。そしてお友達と話をしまして、長崎大学は3人受験をしたんです。私一人
が合格したんです。それで私は決めました。月謝もいないから、医科大学にね、進
もうと。それが始まりですが」

記者 「そして進んだ養成所時代に、永井先生に初めて会われたんですね」

久松さん 「そのときに永井隆先生がね、先生が2度も戦争に行っておられて復員してみえられた
んです。それで永井先生のところからね、ずっとそこで実習っていつて勉強に行つた
り、講義を習つたり始めたんですね。でも私はね、卒業してから、子どもが好きで小
児科にあの、おりました。そしてだんだん大きくなりまして、小児科の主任看護婦を
しておつたんですよ。そのときに永井隆先生のお家は広くてお2階もあつて、そして
あの、出雲^{いずも}から先生を頼つたりいろいろなさつたり、下宿を何人か先生がされたんで
すね。それで私はね、永井先生からお声がかつたんです。あの、婦長にね、来いつ
て。ちょうど。

そして、その先生が兵隊の1年生のころなんかは、戦争の話必ず2時間講義がある
ときは、してくださつて。もうすまして人を笑わせてね。愉快な先生で。そしてズッ
クを履いて。そしていつも『自分で責任を持って生きるんだよ。その時々に合わせて
人を頼りにするんじゃない。自分の責任で精一杯生きていくんだよ』そういう話をし
てくださつてたんだ。この先生は素晴らしいなあと思つていましたけど。病棟も何に
もない、これからというところですから。断りにいこうと思つて私はね。一週間考え
てお断りにいつたんです。そしたらその、当時は物理的療法科と言つておりましたも
んね。放射線科。受付に先生がちょうどいらして。『あ、もう婦長さんがみえられた。
婦長さんがみえた、教室員はみんな集まれ』つて。昔の古い暗室に職員をみんな入れ
て。そして何にもおご馳走はないんです。当時はいもばかりだから。そして先生の
余興がお一人でみんなを笑わせて。自分はすまして床に寝そべつて、汚いリノリウム
のはげかかつたところだね。動物園の(笑)象だとかそれなんかつていつて、一生
懸命踊られる。少し喘息の気がおありでしたから、先生は。ふーふー言いながら、も
う一生懸命になって余興をしてくださるんですよ。断りに行つた私が先生に魅せら
れてしまつて。『よろしくお願ひします』つてなつたんですよ。

そうしましたらね。他の大学の医科大学の教授の先生が『久松くん、あんたはあんな

ところによろ行ったね。なんかあの変人よ、永井君は。困ったことがあったらいつでも来なさいよ。相談に乗るから』って7人くらい言ってくださったんですよ。『有り難いけど先生そんなことはひとつもありませんって。こんなに素晴らしい先生には私は初めてお会いしました、ってもう本当に戦争で鍛えられて、素晴らしい優しいそれこそ如己愛人とは言えなかつですけど。もう本当に素晴らしい先生のところで喜んでおります』と過ごしておったら、やっぱ、その通りだったんですよ。大きくなってもずっと。本当に素晴らしい出会いを頂きました」

記者 「昭和20年の夏ごろというのは、大学病院はどんな感じだったんですか？」

久松さん 「もう、いろいろ書いたり語ったりしておられますけど、その、もう、だんだん戦争がひどくなりますとね、空襲警報、警戒警報って言って、そして、もう、防空壕も自分たちで掘って。なんか鉄兜をかぶって。なんかあれば、すぐ、そこに。空襲になれば防空壕に入る、鉄兜をかぶって。警戒警報になれば出てから、頭巾やら、肩にかけて、床に置かないで、そして、また仕事を、書類を見たりしていましたね。だんだんひどくなります。そうしますとね、もう、患者さんが、ほとんど重症（の人）だけで、軽傷の人は、自宅に帰ってもらってたんですよ。外来も、あんまり、みえません。そんなにひどくなるとね。昭和19年、20年ってなりますとね。

そんな中で、私もあの、疎開を、レントゲンは、ずっとですね。昔の小学校のように、細長い木造の廊下続きの窓にも、ずっと小さい窓が廊下についていてですね。物理的療法科だけ、木造作りだったんです。文部省の方から「疎開をなさい」と言われて、そこは解いてしまって。そしてあの、私はですね、この、今の歯科（歯学部附属病院）があります。そこに、ずっと地下が、あの、あります。こっちの内科の病棟のところで、本館と。私の部屋は、ちょうど、こんな風に後が仕切ってあって、場所が良かったんですよ」

記者 「8月9日、原爆が投下された時は、どちらにいらっしゃったんですか？」

久松さん 「当時、地階って言ってましたけど、（外来本館の）1階ですね。その、婦長室は。永井先生は、本館って楠の大きいのがあるでしょ。ずっと松山の原爆の中心地の方に、先生は向いて、昔のフィルムはよく燃えていたんですが、教材にするフィルムを中心地の方に向いてかざしてました。そして硝子窓がありましたから、先生はね、ここ（こめかみを指差す）がもう手を取ると複雑骨折って言ってずっと奥の方、縫合がしにくいところ、手を取るとびゅっびゅっびゅっびゅっ血が出ます。包帯や三角巾でここを巻いて。すると、軍服のところですね、モールのような大きさの固まってこうしてなりますね。本当に危険な場所。先生のところは、（そんな）場所でしたもんね。当時の学長の角尾学長はちょうど、先生と同じ建物の9階でこう、診察日でしたから内科のご診察をしておられたんですよ。少し違ってましたけどね、入口が。そしたら学長先生もきれいに何でも飛ばされて、靴でも何でも飛ばされて血だらけになっておられた。

そして（永井先生は）教室員に学長先生を救出しなさい、と。そして放射線だけ、物理的療法科だけは日ごろの訓練ですね、行き届いて。病院の玄関にみんな生き残りは集まりました。ほとんど即死しておりません。教室員は。そしたら、昔のレントゲンフィルムがよく燃えるんですから。びゅっびゅびゅっびゅ（って）。わたしたちが疎開したの。病室の窓から炎が出て燃えて。私は『先生、もう、先生逃げましょう。このままではどうもなりません。もう、先生フィルムがよく燃えて教室も燃え出しました』と。家族の人たちはね、自分たちの子どもやら、見つけてね、連れて帰ろうとするわけですよ。でも私は婦長だから責任がありますから。『先生逃げましょう』。もうみんな家族の方連れて帰りよります。『一大事とは、今日、只今このことなり』とかすれた声でおっしゃるんです。何をおっしゃるのかなと思って。『これから、前の角尾学長を、男性は救出しなさい。そして一緒に今火を吹いているところを通過して2階まで、疎開する』。そこには芋を植えたりしておりました。食糧増産で。そこにまず避難をしたわけです。私はまたどうなるんだろうか、こんなにひどいのに。これはねえ。親に対しては申し訳ないし、婦長だから。早く解散していただければいいのにな、と心で思うけれども、命令に従わなければ当時はいけません。そのようにやっておりました。そしたらですね。もう何とも言えないんですよ」

記者 「病院の外に出て見た様子はどんな感じだったのでしょうか？」

久松さん 「平和会館にも、いろいろ資料がありますけどね。即死したお母さんにお子さん、赤ちゃんが生きていて、そのおっぱいをしゃぶるようにしてもがいている人もいるしね、ものすごくこう傷を受けた人もいる、全身火傷の人が。もうどろんこにこう転げ回って、気持ちが悪いから。もうその惨状といたら。私、それを自分で体験してこれではねえ。本当に3年も生きられないだろうなあ、間もなく死ぬであろう、と自分でもそう思いました。そしたら、姉がね、私のところ、姉と弟が私を探しに来たわけです。翌日。翌日来てるんですよ。そうしたら、永井先生が玄関の焼け跡のところにおられて、前からずっと出入りして、お会いしてましたから。（姉と弟とは）顔見知りでしたから、『こんな危ないところに、あなたたちは何しに来たか、早く帰れ』私に会わせてくれないんです。『婦長さんは元気でね、負傷者の治療を救護してる。心配はいらん』。そして（姉と弟が）食べ物を少し持ってきてるんです。それを『それは僕が預かる』、と言ってですね。追い返されてしまったんです。そして会うこともできないでまた歩いて8里の山道を帰ったそうですよ。そしたらその預かりものは、後で、私にはくださってね。だいぶたってから、山の上で。『婦長さん、あのね、これは僕が預かってた。何にも朝から僕は食べてなかったからお先に失敬した』と言ってね。喜んでくださって。そして、かんころもちとか、芋とか、指でこうして食べておられたんですね。本当にいろいろ思い出しますね。それからね、もう3年も生きられないのかなあ、とっていましたけど、最後になりますけどこの年まで生かしていただいて本当に夢のようです」

記者 「広島原爆のことを伝えられたときはどんな風に感じていらっしゃいましたか？」
久松さん 「あのね、6日の日にね、広島に原爆が落とされたでしょ。新聞の、日本の新聞の片隅に『広島に大型爆弾落つ』あるいは『新型爆弾落つ』だったんです。「被害は僅少なり」って、その広島。そしたら時の角尾学長はですね、その日は東京に会議で公務で、出張のお帰りに広島を通過してこなくちゃいけなかったんですね。わたしたちは大詔奉戴日って言って毎月8日はその浦上天主堂うらがみてんしゅどうの横にある大学の運動場、そこに全学部の職員が集まって、学長の訓話を受けるようになっておりました。学長先生は、それに間に合うように歩いて、馬車に乗ったりして、ようやくお着きになりました。おうちにも寄らないで連絡もしないまま。そして、学長先生も『広島に大型爆弾が落ちた』と。『今度は長崎にも必ず爆弾が落とされる、みんな締まっていこう』と。その通りですね。

(8月9日は) 医専の学生やらみんなですね。仮卒業させて夏休みを返上して、講義を受けたり、実習をしたり、訓練をしたりして。ですからね、木造でしたから。医学部は。ほとんど犠牲者。病院の方は鉄筋コンクリートだから、まだ少しは良かった。だけど、寄宿舎は、わたしたちの寄宿舎は、木造建てで、ちょっと上の方にあっただけです。24時間の勤務を、その当時看護婦はしてましたけど、帰って眠ったところを寄宿舎でそのまま(被爆した)。かわすことはできませんでした。本当に、その惨状というのは言葉で言い表すことはできません。体験してみないとわからないというような状態ですね。髪の毛が抜けていたり、全身が焼けてしまって具合が悪いんですよ。田の泥を川の水で煉ってそれを熱気を冷ますように泥人形になってしまった。それから頭蓋骨が割れて、そこから脳が飛び出て、そしてハエがその頃は不潔で、蚊やハエがいっぱい。うじ虫が、わくわけですよ。私は若かった。そのころはまだ18歳でしたかね。毎日、うじを取るわけですよ。三ツ山の教会のそばに、あの、ごろんごろん、やっとな歩いて上っていった人たちが、そして、頭蓋骨が見えるように。ピンセットで。あれ若くないとできないですよ。取ってます。また翌日行きますとね、またウジ虫がいっぱい運動会をしているみたいにいっぱい。ごじょごじょ。もう本当に言葉で言い表すことはできません。大変な目にあいました」

記者 「原爆が落ちた時は、久松さんはどうされていたんですか？」
久松さん 「もうね。わたしたちは永井先生のあれ(指示)で、防空壕も自分たちで掘りました。水槽も掘る。それから天井もですね。先生が訓練をする時、よく昔はフィルムが燃えましたから、フィルムを束ねて天井にして燃やすんです。訓練の時。そんな時、『先生、国の国有財産を、こんな勝手に、こんなして』って私は心の中で、婦長だから思いよりでしたがね。本当に、あの先生すごいことやられたですね。空襲警報、警戒警報。防空壕から出てやっとな仕事にかかろうとすると、『ブーン』。絶え間ないです。防空頭巾を、何でも床に置くわけにはいかん、肩において。もう、なんと言い表していいんでしょうね。本当に核って怖ろしいですね。作ったり、今も、戦争をした

り、やってるけど。絶対ね、やっちゃいけない。心の底から念じます。平和を、平和を。本当に。何と言って、言い表していいの。絶対核を持っちゃいかん、と言いついて聞かせています」

記者 「原爆投下時、音はしたんですか？」

久松さん 「音はね。近くではあまりキャッチできませんでしたよ。あの、もうそんな段じゃなかったんでしょうかね。間近では聞こえません。聞き取れない。『ピカ』だけは。それでもピカドン、ピカドンって言うておりました。あのずっと、今も言います。そのドンはわたしどもはキャッチできませんでした。そばでは。ピカは、もう目が、目が、もう、何とも言えないピカです。その繰り返しですもんね。それから友軍が飛んできたり、外国のアメリカの飛行機が飛んできたりします。そして、友軍が来ててもですね、敵機じゃないってわかってるのに、日の丸がついてるから、永井隆先生は、『伏せをせんと、そのまま立っていちやいけない』。「伏せ」。死体の上であろうと、なんであろうと、繰り返されたらそのつど「伏せ」をしていました。ですから、ふらふらなります。伏せたり立ったり、伏せたり立ったり。間なしです。本当に」

記者 「久松さんは、けがはされなかった？」

久松さん 「それがさ。私が安全地帯にいたでしょ。1階ね。そしてこう、私は本当に運がよかったですよ。その時、蛇口が開いたんですよ。暴風でね。私の部屋の蛇口の音が聞こえて。そしたら横から看護婦が来て、「婦長さん、婦長さん」って。私がね、返事をしようにも返事ができない。ゴミが、いっぱい口に入ってるんですよ。そして長崎の稲佐山からこっちを見ると、ぼんぼんぼんぼん燃えてるんですよ。これは大変。どうなってるんだらうかと。そうしたらね、真っ暗くなっていた私の部屋が、すーっと光が差し込んできたんです。そしてこう見るとね、私の部屋の水道の蛇口が音が聞こえて、じゃーじゃーじゃーじゃー流れてくる。ほーと思ってやっと思いつくばって行って、うがいをして、顔を2、3回ぐるぐるっとしました。そして、そこに三角巾やらなにやら衛生材料も、婦長室だから。ありましたけど、慌ててるんです。ガーゼのあれですね。ここのお腹のところに入れてまたこうして三角巾で結ぶんですけど手が震えて、よう結べないから落とす。そんなことを何回か繰り返しながら出てみました、外に。そしたら、日ごろの訓練というのがいかに大切か。永井先生から、こっぴどくやられてましたからね。さすがに当時の物理的療法科、永井隆教室はみんな揃いました。本当に。もういよいよあれするのかなと思って、これで解散かなと思って。『先生フィルムが燃えてきました、早く逃げましょう。みんな家族が連れて帰りよりも』。広島に爆弾が落ちてから、前の日にやっと思開をさせたんですよ、(永井先生の) 茅乃さんと誠さんという子どもを。そしてお母さん。そして緑夫人は一緒に連れて行って。明日は原爆の日、9日。町内で、先生はね、班長もしておられたんですよ。そして誰々さんが、あの、仕事がひとつ残ってるから、それを片付けてから、お母さんは上ってくるというのが9日だったんです。運命っていうのはね。それで、とうとうお

うちでね、爆死。こんなして、ひざまづいて、ちょうど防空壕の入口か炊事場の入口かなあと思うところに、きちんとあれだけ雨も降ったのにね、首もちゃんとしてこうしてひざまづいてありましたね。私は婦長ですから、大学病院で一生懸命救護活動を、指揮を執りました」

記者 「永井先生は、自宅にも戻られず？」

久松さん 「先生、おうちにね、奥様どうなってるかだけ、帰ってみられたらどうでしょうか、って、男子の足でもそんなかからんでいけると思ったから、もう何回もお話をする、そういうんです。『家内の性分として、ここにみえんのはもうだめでしょう』、そうおっしゃって全然帰ろうとしない。そして2、3日、ここでわたしどもは救護活動を、校内を。そして日赤のよその病院がトラックを連れて来て、大学の負傷者を連れて帰られた。もう大学では、あとまだは地下室に何人か入ってますけど、手のいる負傷者はいないから、今度はどうするのかと思ったら三ツ山の、子どもたちが疎開しているところに行って、そこで救護活動をするんだと。そこに長崎市内からずっと歩いてね、山の方ってね、思ってるんでしょう、市内の人が来てる。だからそこの救護をするんだとおっしゃって、三ツ山で救護活動をした」

記者 「原爆だとわかったのはいつ頃だったんですか？」

久松さん 「いや、これは戦争だ、戦争だってしょっちゅう言っていましたから。一大事と思いましたね。その時は、いやそれがね、ビラを私が拾ったんですよ。校内で救護活動をしているときに。びっくり、それを読みました。途中まで読みました。そして、そばにおられた救護活動をしておられる永井先生に、『先生』って言って、私もびっくりしたから半分ほど読んでから、先生にお渡ししました。先生も顔色が変わりました。真っ青になって、豆粒のような汗が出て、そして座り込んでしまわれた。ゆらゆらしながら指揮を執っておられた、あの永井先生が本当にね、座り込んでしまわれた。絶対アメリカの悪口は言いません。『アメリカが原子爆弾の研究をしていることは、聞いておった』と。ご自分も専門ですからね。永井先生は、『しかし、こんなに早く使えるまでになってるとは知らなかった』、そんな言ったらね、座り込んでしまった。まだ先が色々書いてある、そのビラは。私はね、この先生がここでだめになったらどうしようと、離れきらんのですよ、先生のそばを。あの時はね、もう、時間ってそんなに長くはなかったでしょうけどね、計ることはできませんでした。そして、この永井先生がここで倒れてしまったらどうなるんだろうかと、私はそればかり思ってね。本当に悲しかったです、その時はですね。しかし、その時は、絶対先生は毎日口癖にいつていた、『人をあてにするな、その状況に合わせて自分で研究して生きていくんだぞ、人を頼りにしてはいけない。ベストと思う行動を自分で考えて実行していくんだよ』って。その通りに先生は生きておられたですね。本当に私はびっくりしました」

記者 「久松さんは、おけがもなく・・・」

久松さん 「おかげでね、鉄筋コンクリートだったでしょ。医学部は木造だったでしょ。しかも学

生は仮卒業をさせて早く戦地に送ろうという計画でしたでしょ。だからもう本当にあの病院のほうは、看護婦宿舎が木造でしたからね。ですけど、医学部の方は、全部で890名近く亡くなりましたよ。もう、本当に附属薬学専門部の、今、銅像があそこにたちました。あそこですわね。祈念式があります、1年に1回は。病院の方も今あんなして、見違えるようにして復興しましたが、本当にあの学生たちを思いますとね、病院に実習に来た人は元気になってるんですよ。ちょうど、ポリクリって言って、患者さんを教授が診察するのに出ようと言って、個々の玄関に入ったという先生が助かってますものね。今も立派にあれしてます。運命ですかね。もう、なんて言い表すことはできません。体験しないことにはこれはわかりません」

記者 「永井先生のことを、ずっと語り続けられてますね」

久松さん 「夾竹桃永遠にという本を今差し上げたですね。それを私がね、(看護部長を退職したときに)退職した人たちに卒業生たちに呼びかけて、ご遺族にも呼びかけてその本をまず出したんです、始めに。もう本当にこんな目には絶対世界じゅうの人たちに合わせてはいけない、というのが私は燃えたぎってるんです。本当になんて思ってるんでしょう。永井先生に朝晩私はお話を、天国の永井先生、ってお話をします。そして、今日あったことを晩は休む前に報告し、朝はおはようございます、今日もお陰様で無事に生かしてもらいましたと、感謝の報告。『本当になぜこんなひどい原爆を作ったり戦争を世界中でするんでしょう』って、先生に、ああでしたよこうでしたよ、と報告をして、一生懸命それこそ生かしてもらいたいと思っております。毎日毎日が感謝の毎日でございます」

記者 「薬も無い救護活動でしたが」

久松さん 「それ今も申しましたように、ずっと救護活動、もう本当にね。何にもないでしょ。お薬は。そんな、さっきもお話ししましたが、田の泥を熱気をとるために、あれする。それから男子はですね、大波止のあちらのほうに配給所があって、それを貰いに行く役割。女子は、そこでみんなの手当をするわけですよ。手分けして。そしたら8月15日、私がちょうどお薬の仕入れに焼け跡に行きましてね。終戦の詔勅を、当時の角尾学長の古屋野先生が読み上げられた。本当になんとも言えない気持ち。ただ10人余りでしたかね。生き残りは。古屋野先生が読み上げられたら、私は涙がぼろぼろこぼれて、なんとも言えない。若かった、若かったということはいいです。永井先生のいる三ツ山に、おられるから、そこに報告をせんならん。何をさておいても報告せんならん。薬どころじゃないって言って、どんどん石ころの山道を走ってたどりつきました。先生は玄関の方を向いて休んでおられました。ドアをあければすぐ顔をみえる。『永井先生』。私が泣き顔で言ったら『どうした』、とおっしゃいました。寝たままで、こうこうです(と伝えました)。絶対小言も言わないですね。何にもいわない。「そうだったかー」と自分に言い聞かせて。本当にね、永井隆先生はそれでも素晴らしいと思いました。アメリカの悪口を言うでもない。その時、その時、一生懸命生き

ようと、生きなさいって言ってきたように、先生はいつもそういう態度、立派。私はそのときもびっくりしました。それから毎年、薬専でも病院でも看護婦でも、慰霊祭みたいに集まってやるんですよ」

記者 「救護活動でのご苦労は？」

久松さん 「何にもないでしょう。着るものも、お薬も、食べるものもないでしょう。おいもの煮っころがしくらいしかないでしょう。今は、もう、いろいろありますけど贅沢ですよ。食べ物も着るものもねえ。絶対、もう戦争はしない、核は持たない。これが本当。ずっと守られないといけないことですよ。世界中。それを、特に、原爆を受けた長崎は、特に、大きな声でいつでもとなえていかなければいけないですよ」

記者 「永井博士の言葉の中で印象に残っていることは？」

久松さん 「如己愛人。人間はね、自分のことと思って他人のこと、悲しいことも自分で受け止めて、嬉しいことも受け止めて、本当の意味の如己愛人ですね。生きていく周囲の人たち、大きく言えば世界ですけど、手を貸してあげる。心を寄せてあげる。それがなくちゃいけない。これが愛、愛ですよ。分け与える。本当。先生が言ってました。『茅乃さん、誠さん』って『一緒に、如己堂に一人になっても、戦争は反対するんだよ』。そればかり言ってました。平和の大切さ。みんなと仲良くする、仲良くしてもいいけれど、そりゃあケンカはしょうがないよ、それぞれに人格があるんだから。その人の、人格があるんだから。本当に、その、仲良くするけれどケンカはするけれど、その人格は、自分もお友達から認めていただき、あなたも、お友達を大事にして、一緒に喜ぶときは喜び、悲しいときは悲しんであげる。そういう風な人格を大事にして、とことん話をするのよ。そして悪かったらごめんなさい、って行って素直に謝るような人でないといけないよ。そういうことを、先生は絶えず言ってましたね」

記者 「終戦後もずっと看護師を続けられましたね」

久松さん 「そうです。私は（長崎大学附属病院）看護部長を昭和62年の3月に退職いたしましたでしょ。マスコミの方がね、しょっちゅう私の部屋に来て、忙しいのに。時計を回しとくんですよ。自動的に鳴るように。『あら、病棟で急用があります』、そんな風にして行くんです。行って必ず、私は全部の患者さんを見舞いましたね。一声ずつかけて、走り回って。本当に、そしたら、この頃ですね、新しい病院の、あの、1階のエレベーターのそばで、婦長さんですかね、とかね、看護部長さんでしたね（と言われるんです）。私驚きましたよ。よう覚えておいででしたね。

そして回って行って、お布団が落ちかかっていたらかけてあげて、ゴミ箱がいっぱいになっていたらお話をしながら（片づけて）、花が枯れかかっていたらむしってあげて。何かすることがあるんですよ。そんなのに使って。もうお薬やさんや業者の人とは真面目にお付き合いをしません。だから（語り部活動を）退職したらやります、って言ったから、退職して1年間、一生懸命如己の会を発足させたんです。1年かかって。本当に私も永井先生に教わって、こんないい生活を今もさせて頂いて、指導を頂い

て、有り難いなと毎日感謝しています」

記者 「今一番願うことは」

久松さん 「平和。平和。絶対に核をなくしてほしい。長崎市の市長さんも、ここにも来て頂いたんです。素晴らしいです。平和平和って文部省もね。ほとんど全国から記念館にも来てくださいます。(来てくれた人に)『また大きくなってからもいらしてよ、って。長崎を広島を忘れないようにしてよ』って言うてるんです。そしたらね。みんなが言ってくれるんですよ。職員がね。『100歳まで頑張ってくださいよ』って。『当時の戦争のことを知った人は、だんだんいなくなっておりますから、祈っておりますよ』って言うてくださる。永井先生の御指導よろしく、私は今日があると。朝晩、お話を、天国の先生と話したり、力を得たりしています」

記者 「三ツ山の救護所に移られた後、薬はあったんですか？」

久松さん 「なかったですよ。さっきも話したように。鉱泉がね、わいていたんですよ。永井先生は傷をね、朝と晩は大きな茶器でこうして傷を嬉しそうにして温泉で、三ツ山の。何もできません、救護のあれは。止血のやっとなんかがある。それがひどいんですよ。ジグザグジグザグして。誰も縫合ができない。やっとなんかの調先生(教授)にしてもらって。しかも、この結核が、当時、今のがんなように猛威をふるったんです。そしたら、本省から兵隊さんの健康診断を頼まれて、結核の診断を大学病院の診療を終えて、今日は20人、明日は30人、その次は15人と計画がたって、ずっと治療を配電盤でみてですね。直接みてしまったから、しまいには、あまりの前掛けもしなくなつて被爆する2か月前に、あなたの余命は3年っていわれて、それから被爆をしているから大変な体だった。普通の人なら、もう、体のあれだから、されんと言つてせんですよね」

2008年12月3日 長崎市永井隆記念館で

インタビュー担当

NHK長崎放送局 記者 中富菜津子